

食卓が 勉強机



吉村 幸代

人それぞれに「至福の時」と呼ばれるひとときがある。私にとつてのそれは、パソコンに向かって文章を書いている時かなと思う。洗濯や掃除、車の運転をしながら頭の中で紡いだ文面を、液晶画面に転写しカーソルを動かす。

子どもの頃から作文が好きだった。作文の宿題が出されると嬉しくて、何パターンも書いては登校したものだ。読書感想文コンクールは入選の常連。勉強部屋に表彰状が並び、「将来は物書きに」と夢見る少女だった。

一転して、私には30代の記憶がほとんどない。大半を自身との闘いに費やしてしまったからである。物を書くどころか、日常生活にも支障を来すほどの心の病。苦しいだけの日々。夫や子どもたちをどこか困らせ、両親をひどく悲しませた。「この病気は、薄紙を一枚ずつ剥がすように治していくしかないのです」と主治医から告げられ、母は「女性の一番良い時期を失ってしまう」と泣いた。

ようやく自分を取り戻した時、私はとうとう40歳を超えていた。子育ても終わりかけている。再び生命を得た思いで信州大学大学院受験に挑み、在学中

の平成14年4月、このコラムの掲載が始まった。「食卓が勉強机」というタイトルは、鍋を火にかけ、傍らの食卓で勉強している私の姿そのままのネーミングである。

本コラムを書き続けて間もなく丸13年となる。千支は2巡目に入り、執筆陣の中でも古株。この間に義父と義母、実父を相次いで見送り、昨年末には実母も他界した。

元日の静かな朝、奥座敷に祀った母の遺骨に語りかけた。「お母さんが嫌がったから書かずにきたけれど、やっぱり私は病気の体験を書くよ。お母さんが亡くなったら書き始めようと、心に決めていた」

本当に書きたいことは、なかなか書けない。そして、書かなくてはならないことを、私はまだ書いてない。かつての私と同様に苦しんでいる人たちが、必ず直ると信じ、希望を見出すような文章を発信すること、それが元気になった私に与えられた使命ではないか。書くことは私にとって、生きている証なのだから。

1月生まれの私には、新年と誕生日という仕切り直しの節目二つが同時期に訪れる。親を送り終えた還暦過ぎの人生、そろそろ「悔いなき」を最優先にしても許されよう。

厳寒の日曜日、凍てつく墓地に眠る父の隣に母を納めて手を合わせ、母が私に言った最後のまともな言葉を思い出していた。「自分の信じる道を進めばいいんだよ」

(よしむら・さちよ、前寿台公民館長、主婦〓松本市)

自分の信じる道